

令和2年度 奈良市立六条幼稚園 研究実践概要

園長名 南波 早由美

園児数 52名

1. 研究主題 「こころとからだで感じられる子ども」
—おもしろそう・やってみたい・できた喜び—

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

今年度は新型コロナウイルスの影響で新生活様式が取り入れられ、いろいろな制限がある中でも子どもが楽しいと感じ、夢中になって遊ぶ事が感動体験や感情体験に繋がると捉えた。また、昨年度子ども同士の対話や保育者と子どもとの対話に着目し研究する中で、保育者間で遊びを振り返り、環境の再構成をしたり適切な援助をしたりすることがより遊びの広がりにつながり、意欲や期待につながる事がわかったため、その成果と課題をふまえ、子ども同士や保育者と子どもの対話に加え保育者間の対話を大事にすることで、より遊びが深まり子ども達の「おもしろそう」「やってみたい」とこころとからだで感じ「できた喜び」につながるのではないかと考え主題を設定する。

4 具体的な研究内容

① 研究のねらい

「こころとからだで感じられる子ども」につながる保育者の援助や環境構成について考える。

② 研究の重点

実践より子どもの姿を分析し「おもしろそう・やってみたい・できた喜び」につながるための保育者の援助、関わりについて共通認識する。また保育者間で遊びを振り返り、様々な視点から姿を見取る。

③ 活動の方法

援助・環境構成

職員間の話し合い

保育者の意図

【4歳児】 6月の事例 『泥んこになっていいの?』

(ねらい) 身の回りの環境に興味を持ち、自分から進んでかかわって遊ぶ。

・砂場で遊ぶのが好きなA児は、数日前からシャベルで「大きい山を作るよ」と言って山を作っていた。掘ったところにできた大きな穴を見て、B児が「お風呂みたい」と中に入っていると、友だちがタライから汲んできた水を入れだした。B児も一緒に水をいれて「本物の温泉みたい」と喜んでいたら、A児は「まだお山作ってるのに」と嫌がっていた。「靴が泥んこになるね」「脱いじゃう?」と子どもたちが裸足になり「わー!!泥んこ温泉や!」と楽しむ中、A児は汚れないように気を付けながら遊んでいた。
・毎日同じように泥んこ遊びをしていた子どもたちは、温泉作りから樋を使って水を流し、ダムづくりに遊びを発展させていったが、A児は汚れないような遊びを選び、なかなか友達と一緒にダイナミックに遊ぶことができにくかった。
・新型コロナウイルスの影響でプール遊びがなかったが、水遊びの時に水着を着て遊ぶようにした。そうすると、今まで水を使って遊ぶとしないA児が「これはお水が大丈夫な服やから」と、バケツで水を汲んだり樋に流したりして遊ぶ姿が見られるようになった。泥の中に足を入れ、服に泥水がかかるのは抵抗があったが、楽しそうに泥んこ遊びをする友だちをみて「泥んこになってもいいの?」と、参加しだした。周りの友達も「Aちゃん、泥んこになってもいいねんで」とA児を喜んで受け入れていた。

子ども達が掘りやすいように、砂をやわらかくしておく。

プール遊びに替わる水遊びを楽しむために、水着を着て水遊びをすることにした。

水や泥をたっぷり準備し、クラスの子も達が砂場遊びでのいろいろな遊び方に興味を持てるようにする。

A児が水に触れることや、汚れることに抵抗がなくなっしてほしい。

<考察>

最初は、一人でじっくり自分の遊びを楽しみたいA児の姿があったが、友達の様子が気になっている様子も見られた。しかし、服や靴を汚して遊ぶ経験を、今までしたことがなかったため、他児の遊びと一緒に参加することができにくかった。

プール遊びが新型コロナウイルスの影響でできないということが、夏ならではの遊び方を子ども達が経験する機会を失わせると考え、園庭で水を使った遊びを水着に着替えて楽しめるようにしたことで、A児も服が濡れることを気にせず水を使った遊びを楽しめるようになった。全身で水や砂、泥などの感触を楽しめたことで、汚れることにも抵抗が少なくなり、今まで気になっていた友達のしている遊びにも、積極的に参加できるようになったと考える。

【4歳児】 12月の事例 『縄跳び 何回跳べるかな』

(ねらい) 体を動かすことに意欲的になり、目標に向かって継続して取り組もうとする。

・ぼかぼかタイムで、マラソンと縄跳びをするようになった。初めて短縄に触れる子もいて『縄をくくる』、『地面に置いて飛び越える』などの簡単な目標から『縄を回して一回跳ぶ』など、だんだん難易度を増して挑戦していた。

・縄跳びチャレンジカードを作り、出来た項目のところにシールを張ることを楽しみに、最初はみんな意欲的に挑戦していたが、達成が難しくなってくると諦めてしまい、現状で満足してしまう姿があった。

・跳べた回数で色を変えて、色テープを縄に張っていくようにすると、友達の縄を見て「ピンク色のテープは何回跳べたら貼れるの?」「○○ちゃん、紫のテープやから、10回跳べたんや!」と、友達の達成度を見て、自分も頑張ろうと思えるようになった。

・縄に貼っているテープの数が増えてくると、他の運動遊びにも興味を持てるようになり、鉄棒や平均台渡り、雲梯なども自分で目標を決めて挑戦し、できるようになるまで継続して取り組み、出来た達成感を楽しめるようになってきた。

易しい課題をスムーズに達成できたことで、次の課題にも意欲的に取り組んでほしい。

「ピンクのテープ、いっぱい付いたね。」など、周りの子ども達が友達の頑張りに気づけるような言葉を掛ける。

鉄棒や平均台、巧技台など、いろいろな体育用具に興味を持ち、自分なりの目当てを作って運動遊びに取り組めるようにする。

<考察>

新型コロナウイルスの影響で戸外に出る機会が少なくなり、入園前は体を使って遊ぶ経験が少なかったと思われる。入園後は、体を動かす活動を多く取り入れるようにしたことで、体の使い方が改善されつつあると思う。

しかし継続して練習することなど、しんどいことを頑張ったりやり続けることが苦手という課題があった。縄跳びも、すぐに出来るようにならないので途中で諦めて、縄に触ろうとしない子も出てきた。カードにシールを貼ることは自分では達成感が持てるが、友達同士の刺激は少ないと考え、見てすぐにみんなの達成度がわかるように、縄に色テープを巻くようにすると、友達の頑張りに刺激を受けて、意欲的に練習する子が増えた。

そして、自分では少し高度に思える目標を達成することで、他の運動遊びにも意欲を持って挑戦しようという気持ちが芽生えてきたと考える。

【5歳児】 11月の事例 『くるくる寿司みたいに回したい』

(ねらい) 共通の目的をもった友達と考えを出し合いながら、遊びや活動に意欲的に取り組む。

・A児「お寿司屋さんをしたい」と友達とクッション材や画用紙などを使ってお寿司作りをして遊んでいると「本物のお店みたいにくるくる回るお店屋さんになりたい」D児「プラレールの上にお寿司を乗せたらお店みたいになるかな?」と提案し、次の日用意されたプラレールを使ってレーンを作ることになり、お寿司をどう乗せたらいいか試している。

A児「そのまま乗せてしまうと落ちちゃった」B児「この発泡スチロールを電車の上に貼ったら落ちないと思う」A、C、D児も「それいい考えだね!お寿司が落ちないと思う」と発泡スチロールを貼って走らせてみたが、カーブを曲がるができなかった。D児「繫げ

クッション材やエアキャップ、画用紙、フェルトなど、様々な素材を用意する。

B児の考えを聞いて、一緒に工夫しながら遊びを広げてほしい。

て貼っているから曲がらないのかな？」B児「そうしたら、短く切ろう」と発泡スチロールを短く切って乗せるが、お寿司が落ちてしまった。するとA児が「横に壁がないから落ちるのかな。大きいカップでしょう」と提案し、豆腐カップを貼って走らせてみると、お寿司が落ちずに回ることができた。その様子を見て「倒れないで回ったよ！」と喜びの声があがった。

・その後、たくさんのお客さんに来てもらえるようにA児「のぼりににじ寿司って書いてたら遠くから見てもわかるね！僕は密にならないように看板を書けね」E、F児「字の横にお寿司の絵があった方がいいと思うから絵を描けね」と役割分担しながら墨汁で字を書いたり、クレパスやマジックで絵を描いたりした。

・A児「テイクアウトしよう」とスクーターに荷台を作り、弁当箱にお寿司を詰めて職員室や他のクラスに配達しに行った。

・オープン当日はたくさんのお客さんで大賑わいだった。C児「お客さんたくさん来てくれたね！」A児「もっとお客さん呼んでくる！その間お寿司入れといてくれる？」D児「わかった。お客さんいっぱい呼んで来てね」C児「電車倒れたから僕、直してくるね」と忙しくしながらも友達と協力しながら遊ぶ姿が見られた。

友達と一緒に一つの物を完成させたい思いに共感し、子どもの声を受け止め環境を準備する。



4歳児を誘いたい思いを受け、年齢間で遊びの様子を共有し、誘いあって遊べる環境を用意する。

<考察> A児の「本物のお店みたいにくるくる回るお店屋さんになりたい！」という思いに周りの子ども達が共感し、お寿司が落ちないようにどうしたらいいか「発泡スチロールを電車の上に貼ったら落ちないかな？」「大きいカップだったらどうかな？」と悩んだり、やってみて「繋げて貼っているから曲がらないのかな？」「短く切ってみよう」と気付いたりして、みんなで思いや考えを伝えて工夫して遊ぶことを楽しめた。また、のぼりを作ったり、コロナウイルス感染防止のために看板や消毒を置くところを作ったり、たくさんのお客さんで忙しくしながらも共通の目的に向かって友達と協力しながら遊ぶことを楽しめ、友達とイメージを共有し協力しながら遊ぶ事で幼児期の終わりまでに育ててほしい力が身についてきたと考える。

【5歳児】11月の事例 『迷路で遊ぼう』

(ねらい)

- ・友達と一緒に考えたり試したりしながら遊びを進める。
- ・友達と同じ目的に向かい、思いを伝え合って遊びを進める。
- ・自分たちが作った迷路で遊び、満足感や達成感を味わう。

・迷路の家をつくろうと段ボールをたくさんつなげていたが、根気よく遊びを進める事が苦手なため、遊びが途切れることもあった。他児も興味をもっていたので、保育者も遊びに入り一緒に楽しんでた。徐々に段ボールが繋がっていくと、少しイメージが湧いてきたためか、始めに迷路づくりをしていたA児達も面白そうと遊びに参加し、更に道を繋げようと進んでいた。

・お客さんが来ると、何をしなければいけないかをみんなで考えS「案内する」A「僕はチケットにスタンプを押す」E児「僕チケット配る」R「私も一緒に配る」とそれぞれ役割分担をして取り組むことが決まった。C児「人がいっぱいになるから5人ずつ入ってもらおう」E児「走ったら壊れるからハイハイで行ってもらおう」と迷路を楽しんでもらうためのルールも決めた。

「5人ずつ入ってください」「ハイハイで進んでください」等の看板をかいて入口に貼りチケットを配ると、楽しみに待っていてくれた他クラス子ども達が次々に来てくれ「いっぱいお客さん来てくれた」と喜んでた。

継続して遊びを楽しむようにコーナーを整え、材料を用意しておく。

役割を決めて遊ぶことで更に遊びが広がって欲しい。



S児「こっち(壁浴い)に並んでください」と声をかけ、D児「ソーシャルディスタンス」と言いながら並んでもらう床にテープを貼り「テープの所に並んでください」と伝えていた。
その後もチケット入れを置いたり、上靴置き場にテープを貼ったりとその場その場で考え、工夫しながら進めていた。

・その後も、運動遊びに使うトンネルや平ゴムを付けた棒(蜘蛛の巣)等を迷路のコースに取り入れるなど、子どもたち自身で遊びを進める姿が見られるようになった。作品展参観(11/30)では、保護者に自分たちが工夫した事や頑張った事、遊び方を説明しながら迷路を一緒に楽しみ、満足そうであった。又、保護者からの感想が書かれたボードに「迷路難しかったけど、とても楽しかった」「みんなで力を合わせて作った迷路、すごく上手にできてたね」等が書かれており、それを見て喜んで

イメージを共有しながら遊びを進めているのは、5歳児ならではの遊び方だな



<考察>

- ・コロナ禍の中、新しい生活様式を取り入れ、保育者は幼児と共に感染拡大を防ぐように取り組んでいる。身近な人の命を守る為にも、感染リスクを減らし、うつらない・うつさない習慣を身につけていくようにしていく。遊びの中でも視点を変えて、コロナだからできないではなく、できる形に変えていく。
- ・迷路遊びを自尊感情や・規範意識・学習意欲の育ちからみると
(自尊感情) 迷路遊びでは子どもや先生と一緒に考え、相談しながら一人一人が自分らしく表現し、工夫したり試したりして作り上げ、成し遂げた喜びを共に味わえた。
(規範意識) コロナ感染防止の対応を子どもたちは社会の状況からソーシャルディスタンスを遊びの中でも意識して、テープを貼り誘導する姿が見られた。
(学習意欲) 沢山の段ボールを繋げ、1人ではできないことを協力したり、相談したりして見通しを立て、計画的に遊びを進めていくことができた。
- ・子どもたちは迷路遊びをきっかけに同じ目的に向かって、友達と相談したり工夫したりしながら遊ぶようになってきた。直ぐに遊ぶことができる場の確保や十分な時間の保障、そして保育者も遊びの一員となって共に考えることで、根気強く遊ぶようになったと考える。
- ・自分たちが面白いと思い作ってきた迷路に、友達や先生、保護者を招き、みんなに楽しんでもらい認めてもらえたことで、達成感を味わい成し遂げた喜びを共有することができたように思われる。この経験が更なる遊びの発展や継続に繋がっていくのではないかと考える。

5. 研究の成果

- ・保育者間の対話の中から、子ども達のあそびや生活にはコロナ禍による新様式が少なからず影響していて、臨時休園明けの子ども達には意欲や友だちからの刺激が少ないことが認識された。
- ・4歳児は環境を整え、友達の頑張りや姿を目で見えるようにしたことで意欲的な遊びに繋がりを更に遊びを進めていった。
- ・5歳児は子ども同士が話し合い、同じ目的を達成するために試行錯誤をしながら目標に向けて心を動かしていった。
- ・事例の分析から子ども達に必要な幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に照らし合わせたカリキュラムを展開して行けたと考える。保育者は職員間で対話を繰り返しながらコロナ禍の中でも子ども達が「おもしろそう」「やってみたい」と感じる環境を再構築していった。

6. 今後の課題

今年度はコロナ禍の中、子ども同士で集まって話し合いをすることや、身体を使って触れ合う遊びなどが進めにくかった。しかし、ソーシャルディスタンスを保ちながら話し合ったり、運動用具を使った体を動かす遊びなど、活動方法を工夫することで、友達と遊びを深めたり、のびのび体を動かしたりしながら、コロナ禍での生活方法も身につけることができた。

今年度の遊びの姿を見て、新しい遊び方や環境を子ども達と共に構成することで、積極的に遊びに参加すると感じた。今後は新型コロナウイルスと共存していかなければならないので、その中でも魅力的な遊びの環境を子どもと共に作っていきけるように、教材研究に努めていきたい。